



サシイデス。オトウトガヒトリトイモウトガヒトリイマス。イマガッコウノチカクニスンデイマス。コウコウデ アタラシイクラスデトモダチヲツクリマシタ。ワタシハ2ネンセイニナリマシタ。エンソクニイキマシタ。スゴクタノシカッタデス。ウミモイキマシタ。 ガッコウデブカツニハイリマシタ。ホウソウブニハイリマシタ。トテモタノシイデス。ホウソウブデ ヒルゴハンノジカンニオンガクヲホウソウシマシタ。バスケブモハイリマシタ。シアイハアリマセン。ナゼナラワタシタチハヨワイカラデス。ゼンブレンシュウデス。シカシ ワタシノガッコウノダンシバスケブハメチャスゴイデス。センシュウカンサイノワカヤマニイキマシタ。ワタシワ ミンナト?ライッパイツクリマシタ。ワタシハタノシクテネレンカッタ。デンドウジテンシャデ ウミマデサイクリングニイキマスタ。ウレシカッタデス。アーチストノオネエサントオサラヲツクリマシタ。 アトデ イエニカエッタ アカチャンワ ケシゴムヲフンシツ?シマシタ。カナシカッタデス。一番好きなケシゴムダツタノニ!ライゲツ6ガツ21ニチニカエリマス。



(米山奨学生) 楊 立山 様 奨学金支給とご挨拶

皆さん今晚は ご報告ですが、来週 12 日から 17 日まで東京銀座の小林画廊で展示会をいたします。ここは現代美術中心のところですので。ご都合のつく方はご覧下さい。

ビジターのご紹介： 金沢RC 石野 洋 様



吉田 昭生 会員

今月の誕生者の紹介

3日生まれ 岩倉 舟伊智 会員 22日生まれ 吉田 昭生 会員
22日生まれ 相良 光貞 会員

《 食 事 》

幹事報告/委員会報告



上杉輝子幹事： 砺波RCより夜高例会開催の案内が届いています。平成26年6月14日(土) 18:00から登録料3,000円です。参加希望の方は5/30までに事務局へお申し込み下さい。

北山吉明直前会長： 近況ですが、辰己クミさんにお会いしましたところ、忙しくて特に木曜は移動日で例会は出席出来ずにいますが心はいつももロータリーにありますとのことでした。



ニコニコBOX ￥4,000- 本年度 ￥578,100- 残高 ￥5,346,814

野城会長： 小林様、村井様、ブリアナ様、やん様、ようこそおいでいただきました。宜しくお願いいたします。**上杉幹事：** 小林先生、ようこそいらっしやいました。楽しみにしています。ラフォル・ジュルネの音楽祭にうちの廉君、3日間ピアノ演奏出して頂き、頑張りました。**宮永会員：** 小林先生お話し楽しみにしています。

講話の時間

『金沢に残る江戸の伝承文化』

北陸大学 未来創造学部 国際教養学科 教授 小林 忠雄 様



プロフィール：

小林 忠雄 (こばやし ただお)
北陸大学 未来創造学部 国際教養学科 教授/博士 (文学)
1945 (昭和 20) 年 石川県白山市 (旧松任町) 生まれ。
金沢泉丘高等学校、早稲田大学大学院文学研究科
芸術学専攻特殊学生終了。

石川県立歴史博物館資料課長、国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授、東京家政学院大学人文学部工芸文化学科教授、北陸大学教育能力開発センター教授を経て 2005 年から現職。 専門、都市民俗学。民俗芸術学。

石川県学術資料調査研究委員会委員 (金沢部会・世界遺産推進室)。日本民俗学会評議員。金沢市景観審議会委員。金沢港大野からくり記念館評議員。白山市文化財保護審議委員会会長。その他



主な著書

- (共著)『能登一寄り神と海の村』NHK ブックス 1973
(単著)『都市民俗学—都市のフォークソサエティ—』名著出版 1989
(編著)『変身する—仮面と異装の精神史—』平凡社 1992
(単著)『色彩のフォークロア—都市のなかの基層感覚—』雄山閣出版 1993
(共著)『花の文化誌』雄山閣出版 1999
(編著)『色彩から歴史を読む』ダイヤモンド社 1999
(単著)『江戸・東京はどんな色—色彩表現を読む—』教育出版 2000
(監修・執筆)『日本人の暮らし—20世紀生活博物館—』講談社 2000
(編著)『現代都市伝承論』岩田書院 2005
(単著)『金沢、まちの記憶 五感の記憶』能登印刷出版部 2009

その他記録映画制作監督作品

- 『奥能登のあえのこと—稲霊祭祀の記録—』(石川県立歴史博物館) 1981
『金沢七連区民俗誌—都市に生きる人々—』(国立歴史民俗博物館) 1992
『風の盆ふいりんぐ—越中八尾民俗誌—』(国立歴史民俗博物館) 1997

講話：

金沢百万石ロータリークラブ・レジュメ (2014・5・8)

「金沢に残る江戸の伝承文化」

北陸大学未来創造学部・国際教養学科 小林 忠雄

(1) 都市空間構造

金沢には江戸の伝承文化が数多く残されている。城下町の形態が江戸に似るといふ指摘は既に知られているが、なかでも江戸の兵学者、有沢武貞が「越登加三州の武士、大中小身、皆一府に集まって広大をなすこと江戸の風」と述べ、金沢を小江戸と見た。参勤交代などによる武士の往来によって江戸の情報は刻々と金沢城下町に伝えられ、影響を与えた。儒学者金子鶴村の『鶴村日記』にも江戸の話が数多くある。

徳川家康は江戸城下の整備に金沢より喜多村彦右衛門を招き町年寄に任命し着手。江戸は金沢城下町を参考に建設したとする田中説。(田中喜男『金沢町人の世界』国書刊行会 1988年)「〇〇口」という表現。江戸の出入り口は品川口、田安口、神田口、浅草口、舟口(江戸湊)の五口。金沢は浅野川口、犀川口、小立野口、矢口の四口。(『池田弥三郎著作集9巻暮しの民俗誌』角川書店 1979)

(田中喜男『金沢町人の世界』国書刊行会 1988・小林忠雄『都市民俗学・都市のフォークソサエティ—』名著出版 1990)

(2) 鬼子母神信仰

金沢、東山2丁目の日蓮宗真成寺は、元は小松にあり。隠居した前田利常の庇護を受ける。万治2年(1659)に金沢の東山に移転。前年の万治元年に利常が死去。

江戸三大鬼子母神の一つは雑司ヶ谷の法明寺の鬼子母神堂、永禄4年(1561)に鬼子母神尊像を発掘、天正6年(1578)に稲荷の森(現在地)に堂宇を建立。現在のお堂は寛文4年(1664)に前田利常の息女で安芸藩浅野家に嫁した自昌院殿英心妙大姉の寄進により建立。自昌院は利常の三女、満。母は天徳院、徳川家光の養女となり、寛永12年広島藩浅野光辰に嫁す。「広島御前」と呼ばれた。安産、子育てを祈願。特に日蓮聖人は「十羅刹女と申すは十人の大鬼神女、四天下の一切の鬼神の母なり。また十羅刹女の母なり、鬼子母神これなり」と述べ、信者・宗徒の守護神とした。

次いで万治2年(1659)に日融上人により法華宗真源寺(台東区下谷)に入谷鬼子母神が建立された。この時期は真成寺の移転と重なる。いずれにしろ鬼子母神は利常と深く関係してきた。利常が案じたのは世嗣断絶の制度だった。真成寺は江戸歌舞伎の中村歌右衛門の墓所としても有名。

(3) 四万六千日

卯辰山長谷寺観音院の「四万六千日」は旧暦7月9日(宵祭)、10日が縁日。この日参ると四万六千日分お参りしたことになる功德日。この日唐黍を食べれば、災いを免れ、福を招くという。江戸の浅草寺(観音様)の「四万六千日」では、はじめ境内に茶筌を売る店が出たが寛政年間になくなり、次いで文化年間の末に赤唐黍を売るのに替わったが、始まりは雷除けとされた。

(山崎美成『三養雑記』)参詣者は唐黍を天井の棧に挟み落雷除けを祈った。この行事は江戸にのみあり、大坂にはない。また芝愛宕山の四万六千日は「御夢想の虫の薬」と称して青ホウズキを売る店がでた。毎年7月10日の浅草観音も唐黍市からホウズキ市に変わった。(『守貞漫稿』)現在、半紙に長谷観音院の寺名を書いたものに紅白の水引を結び、玄關に吊下げる。唐黍の先に毛が多いことから「モウケ(儲け)」の意味もあり、商家で多く吊下げられる。

(4) 氷室行事

旧暦6月1日(現7月1日)は「氷室朔日」という。元は平安時代から宮中で行われた「氷室の祝」「賜氷の節会」という夏越し祓いの神事による。江戸将軍家もこの日を「もん日(神事もある日)」とし、まず宮中、将軍家が氷を食べ、次いで下々がこれを食べという儀礼。幕府は吹上御庭の氷室小屋の氷を御三家、老中、若年寄と順に食べる。『東都歳事記』には加州侯藩邸の氷室から氷が献上されたと記す。その理由は『江戸名所記』の「駒込富士(富士権現)」には江戸本郷の一隅にある小山の大木の下に6月1日に大雪が降ったとの故事に因む。後に加賀藩上屋敷内に囲い込まれる。『鬼園小説』には「江戸本郷加州御屋敷氷室の場所は、慶長八癸卯六月朔日雪降りたる所なり。この雪富士の形につもりたるゆえに、其所へ浅間の宮を造立し毎年六月朔日まつりをなす」とある。

本来正月のお鏡餅を「歯固め」ともいう。餅には霊力があり、柳田國男は「これも正月の延長であり、六月は正月をやり直す月とされた。江戸時代には前半に悪いことが起きると数回、流行正月や仮作正月を行い、祝い直すことがあった。そこで再度6月1日を元旦に見立て、鏡餅をつくった。後に、正月の餅をとっておき煎り菓子にして食べた、歯を丈夫にし、夏を乗り越える。鬼の牙(おんのきば)という。この背景には古代中国の二十八宿星座のひとつ「鬼宿星」と関係、忌む日とされた。

市中では四つ刻(午前10時頃)から「氷、氷、雪の氷、白山氷」「ガバリ、ガバリ」と呼んで売り歩くものがいた。医王山や手取川・犀川峡谷などの谷間の根雪を箆に包み、鋸で切った氷の塊を箆の葉にくるみ、白砂糖をまぶして噛んだ。富山では「立山水」と称した。また塩餡もしくは何も入れず、塩味だけの麦饅頭と煎り豆、煎り米、炙った干し餅を食べた。能登では煎菓子盆、煎粉盆という。享保年間に金沢片町の生菓子屋、道願屋彦兵衛が発案し、またお城の御門前の西町新保屋の麦饅頭(後に氷室饅頭)が有名。明治に入ると「氷室饅頭」が定着した。

(宮田登『江戸歳時記』吉川弘文館 1981)

(5) あんころ餅

金沢の「あんころ餅」は江戸時代の元文2年(1737)6月17日に利常公が野田の桃雲寺にて祖先祭を催した際に、関東よりこの「あんころ餅」を作ることのできる老婆を連れてきたと伝える。江戸ではこれを「あんころばし」称していた。現白山市の成の円八が天狗にさらわれ、あるとき家族にあんころの製法を教え、売り出したところよく売れた。庭内に天狗が宿る樹齢200年の柏の樹を植える。この木を植えた年が元文2年6月16日としている。

また関西ではアンモもしくはアモと呼ばれるもので、同じ製法である。

(日置謙遺稿『加能外史 楽晩荘随筆』昭和27年北国新聞社)

(6) 加賀鳶

金沢は江戸時代に大火が多かった。100軒以上を焼いた火事は寛永8年(1631)に始まり約50件に及ぶ。寛永12年は1万余戸、元禄3年は6,600戸、宝暦9年は1万500戸とある。加賀藩の武士による定火消は3代利常の寛永元年(1624)からで、町火消もその後万治年間につくられている。「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるほど江戸の大火も9年に1度の割合で起こった。享保元年(1716年)につくられた江戸の町火消は大組10番、小組いろは47組で、なかでも神田の「よ組」は720人をかかえた。加賀鳶は5代綱紀が享保3年に江戸の藩邸を守る私設消防組としてつくらせた。鳶職を雇い、小頭4名、御纏持ち4名、鳶の者40名を二手に分け、1隊は上屋敷に、もう1隊は中屋敷の火見番所に常備させた。

明治2年(1869)に金沢藩知事として赴任した前田慶寧は加賀鳶38人を引き連れて金沢入りし、金沢の町方から250人を選び、1番手〜3番手の3組に分け、犀川と浅野川の両大橋詰、堤町の3か所に火の見櫓を立て、藩の定火消として常駐させた。明治4年の廃藩置県により解体、大半は江戸へ帰還した。一部の加賀鳶は残り、その後新たに組織された義勇消防団を指導した。加賀鳶から伝承された江戸文化に、梯子登りの妙技がある。現在妙技は連続技27種類で、一本火の見、簡単夢枕、二本火の見、肝返り(ふらん)、衣裳直し、鯨銚、逆さ大、魂つぶし、足首留め、八艘飛び、灰吹き、背亀、ツマドメ表と裏、横大、鳶の谷渡り、敬礼などがある。その他江戸の木遣り歌も伝わる。

(小林忠雄『金沢・まちの記憶 五感の記憶』能登印刷出版部 2009・『石川県消防史』1961)

その他 7月26日夜、寺町、諏訪神社の月待ち神事(三光さん・下弦の月を拝む)
江戸の庚申信仰の伝播

点 鐘

2014 - 15 年度のための地区研修協議会のお知らせ

ガバナー湯浅外志男 ガバナーエレクト 永田 義邦
 ホストクラブ/高岡万葉ロータリークラブ 会長 稲谷 嘉則 実行委員長 岡本清右衛門
 特別出席者の方々並びに各クラブの出席対象者の皆様、新会員(入会3年未満)の出席

5/25(日)地区協議会(富山県高岡文化ホール)出席者一覧

【連絡事項】

名札を事前に次期幹事 井口さんにお預けいたしますので、皆様に配布願います。(特別出席者は不要)
 当日資料は受付時に次期幹事にまとめて渡されることになっております。井口さんよろしく願います。
 特別出席者の皆様は個々に受付をして、名札を受け取って下さい。
 宮永さんは「クラブ会長要覧」を、井口さんは「クラブ幹事要覧」をご持参下さい。

出席者	宮永 満祐美	井口 千夏	魏 賢任	若狭 豊	永原 源八郎
	西村 邦雄	野城 勲	石丸 幹夫	上杉 輝子	武藤 清秀
	大路 孝之	穴戸 紀文			
特別出席者	炭谷 亮一	後出 博敏	藤間 勘菊	谷 伊津子	

計 16名

会議名	場所	時間	出席者
次期クラブ会長会議	多目的小ホール	11:00受付開始 11:20~12:00	後出 博敏 宮永 満祐美
全体会議 I	大ホール	12:30~受付開始 13:00~14:10	全員
分科会	第1分科会	大ホール	14:30~16:00
	クラブ役員 職業奉仕 社会奉仕 ロータリー財団		谷 伊津子(サブリーダー) 宮永 満祐美 井口 千夏 魏 賢任 若狭 豊 後出 博敏 永原 源一郎 西村 邦雄 穴戸 紀文
	第2分科会	多目的小ホール	14:30~16:00
	クラブ奉仕部門		炭谷 亮一(カウンセラー) 石丸 幹夫 野城 勲
	第3分科会	3階 第2会議室	14:30~16:00
	青少年奉仕部門		上杉 輝子
	第4分科会	3階 第4会議室	14:30~16:00
	国際奉仕部門		武藤 清秀
	第5分科会	3階 ギャラリー	14:30~16:00
	R米山記念奨学会		藤間 勘菊(サブリーダー) 大路 孝之
全体会議 II	大ホール	16:20~17:10	全員

17:10 閉会点鐘

2014-2015 年度 RI テーマ : Light Up Rotary ロータリーに輝きを

1.開催日時 平成 26 年 5 月 25 日(日)
13:00 ~ 17:10

2.開催場所 富山県高岡文化ホール
富山県高岡市中川園町 13-1
TEL 0766-25-4141

3.出席対象者 【次期クラブ会長会議】
ガバナー、ガバナーエレクト、現・次期
地区幹事、現・次期地区
財務委員長、現・次期地区監査委員長、
次期クラブ会長
※オブザーバー:ガバナーノミニ、
2015-16 年度 [地区幹事。地区財務委員
長]

【全体会議】次期 [会長・幹事・会計・
理事・役員・各委員長]
新会員(入会3年未満)、特別出席者

『2013-14 年度 慰労会(例会)』と『新入会員の歓迎会』のご案内

今年度も残り 2 ヶ月余りとなりました。今年度野城会長・上杉幹事をはじめ役員の方々の慰労会と今年度入会頂いた穴戸会員、稲山会員、高田会員の歓迎会を下記の通り企画致しました。
 今年度も、大変お疲れ様でした。万障繰り合わせの上、多数ご出席いただきますようご案内申し上げます。ご家族の参加も歓迎いたします。

記: 日 時 2014 年 6 月 26 日(木) 19 時 00 分より

場 所 ジャルダン ポール・ボキューズ

金沢市広坂 21-1 しいのき迎賓館内(TEL:261-1161)

会 費 会員・ご家族 13,000 円

※参加人数によっては金額アップの場合もありますのでご了承下さい。

申込〆切 6 月 5 日(木)

金沢百万石ロータリークラブ 会長エレクト 宮永 満祐美 副 幹 事 井口 千夏

米山便り

平成 26 年春の外国人叙勲で、台湾で“エビ養殖の父”として知られる米山学友、廖一久さん(1965-68 / 田原 R C)が、旭日中綬章を受章されました。

廖さんは日本留学中、東京大学で水産学を研究し、帰国後は台湾の水産試験所の研究員として、世界に先駆けてブラックタイガーエビの養殖を成功させるなど、台湾のみならず世界の養殖業に多大な影響を与えました。

2012 年には世界水産養殖同盟(Global Aquaculture Alliance)による GOAL(Global Outlook for Aquaculture Leadership) 2012 大会で終身功績賞を受賞、又、2009 年には台湾で最も権威のある科学賞、第 5 回総統科学賞を受賞しています。

【廖一久さんからの喜びのコメント】4 月 29 日、岸田文雄外務大臣より「旭日中綬章」を授与いたす旨の

祝電を頂きました。身にあまる、望外な名誉で恐縮しております。私が長年研究して参りました魚介類、とりわけエビ類の養殖技術開発研究とその学術交流が、日台間の関係に貢献したことが評価されて今回の受章となりました。

これは皆様から頂いたご支援とご鞭撻、特に、私の留学生時代に頂きました米山奨学金に負うところが大変大きいと思います。心より厚く感謝致します。今回の叙勲の名誉を汚すことのないように、心を引き締めて精進する所存です。

その他の記事は、ぜひ PDF 版をご覧ください。→ http://www.rotary-yoneyama.or.jp/summary/pdf/highlight170_pdf.pdf

公益財団法人ロータリー米山記念奨学会 事務局長 岩邊俊久 編集担当 野津・峯

Tel : 03-3434-8681 Fax : 03-3578-8281 問い合わせメール : highlight@rotary-yoneyama.or.jp

米山記念奨学会ホームページ : <http://www.rotary-yoneyama.or.jp/>

パストガバナーからの手紙 176回 炭谷 亮一

良書探訪その6 DIE WEISSE ROSE ~白バラは散らず~

4月5日ラオスからの帰途、東京に立ち寄った。たまたま新宿の書店で目にしたのは本書である。表紙のモノクロの女性は物憂げな表情をしており、発行日を見ると第1刷は1964年、本書は2009年第46刷となっており、ノンフィクション分野の書籍で50年近くのロングセラーに驚き、ページをパラパラめくって見ると、どうやら第二次世界大戦時のドイツ国内の反戦運動を扱った本の様で、早速購入しホテルで読んだ。

翻訳者は1954年にミュンヘン大学の前に「シェル兄妹広場」と言う標札を見て、何か意味があるのだらうと考えていた。その後たまたまハンブルグ大学の図書館に多数の学生が読んだと思われる、手アカで汚れた「DIE WEISSE ROSE 白いバラ」と言うタイトルでシェル兄妹の姉インゲ・シェルが「シェル弟妹」の思い出を綴った本を目にした。付録として当時の反戦ビラ（白いバラ通信）を備えていた。訳者は一読して深い感銘を受け、翻訳本を1964年に出版した。

「シェル兄妹広場」の名称は、第二次世界大戦時にあの思想統制と恐怖政治の最中に、ヒトラー反対・戦争反対の抗議運動を起こして、結果死刑となった学生を追悼する為のものであった。シェル兄妹はいかなる抵抗組織にも関わりのないノンポリのごく普通の大学生であり、それ故に純粋な苦悩や情熱からの行動であり、そして著者である姉インゲも又文学や政治には素人であると謙虚に記している。戦時下での学生生活、戦争体験、抗議行動、逮捕、裁判そして処刑までを、しごく淡々と記述している。

フランスの組織されたレジスタンスやドイツの国外亡命者の反ナチ運動とは異なり、シェル兄妹の場合は国内で絶対権力打倒の為に、無手勝流でまさに体をはった死を賭しての抗議運動であり、中世にローマ・カソリック教会の絶対的な権威に恐れることなく「95ヶ条のテーゼ」を答うた「マルチン・ルター」と同様に、真のドイツ人魂を見た思いがする。

当時のドイツは全体主義・軍国主義の国家社会主義・ナチスに死を恐れず正々堂々と反対ののろしを上げた著者がいたことに心から驚かされた。同じ様な状況の当時の日本で、反戦運動し特高に逮捕そして処罰された若者がいた話などついぞ聞いたことがない。ドイツにはキリスト教精神のベースがある為なのか？個人主義が確立している為なのか？ドイツ社会は日本社会より成熟している為なのか？日本には勇気のある若者がいなかった為なのか？私は不思議で複雑な読後感に陥った。

「白バラは散らず」 インゲ・シェル著 内垣 啓一 訳 未来社刊 (1,200円+税)

ポリオ感染者が増加、しかも常在3か国から10か国に拡大

WHOは2014年5月5日、世界的にポリオ（急性灰白髄炎）感染が拡大する恐れがあるとして「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」(PHEIC)を宣言した。WHOによると、これまでにポリオ感染が確認されている国は、ポリオ常在国であるアフガニスタン、ナイジェリア、パキスタンの3か国から、2014年4月29日までに、新たに赤道ギニア、イラク、カメルーン、シリア、エチオピア、ソマリア、ケニアと少なくとも10か国へ拡大している。WHOの集計によると、野生型ポリオウイルスによる感染例は、2013年4月30日から2014年4月29日の12カ月間で447例だった。ソマリアが190例、パキスタンが139例と多く、シリアが36例、ナイジェリアが31例、アフガニスタンが15例などで続いている。

ポリオが発生している国に渡航する人は、追加の予防接種を検討するよう求めている。

(日経メディカルの記事より引用)

いずれも紛争国とその近隣国です。

残念ですがEND POLIO NOW が後退しました。

愚かしい戦争、権力の集中とそれを利用して私腹を肥やす人々の行いが招いたものです。

ロータリーの理想が試されています。

村田祐一 記